横浜大空襲　その３

永井　藤樹

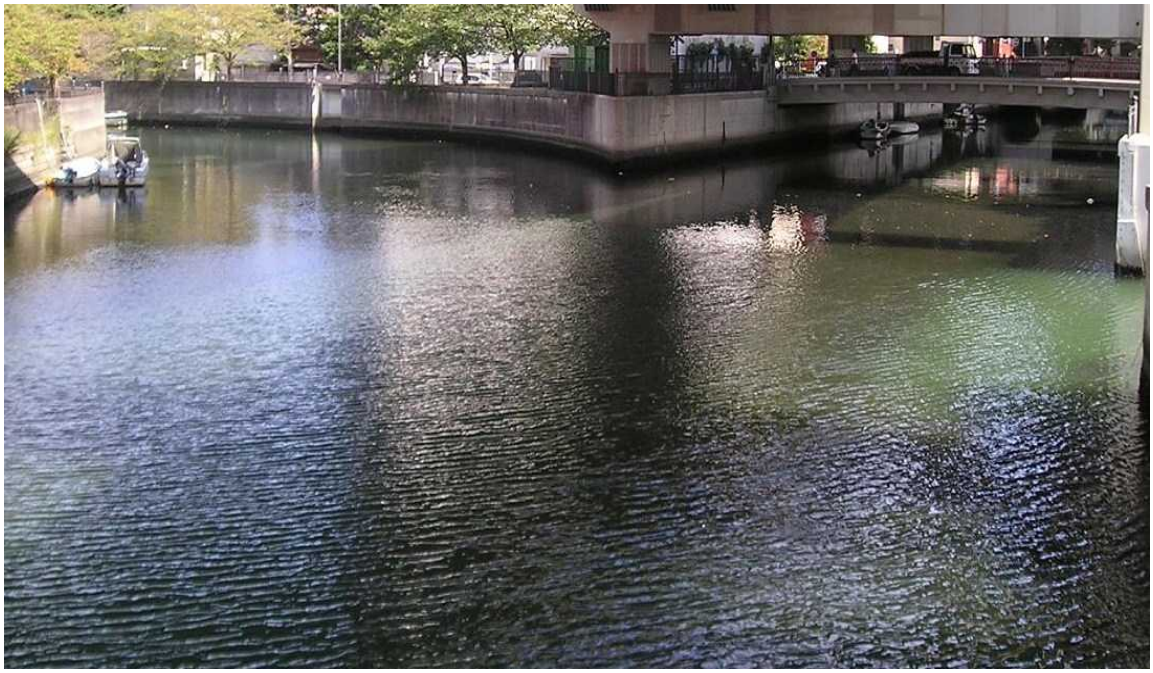
末吉町三丁目と四丁目は「藤棚浦舟通り」に向かい合う「通り町」である。「大岡川」に架かる「太田橋」の４本ある橋柱の上に、高さ２ｍほどの江戸時代風常夜灯が設けられ、夜になると灯りがともされ「太田橋」を徴ある橋にしている。

（写真１　太田橋の常夜灯）

橋近くの刃物屋に立ち寄り、年輩の店番の方に、「浦舟通り」に市電が走っていなかったか尋ねると、よくぞ聞いてくれたと言わぬばかりに話し出した。やはりそうか。この通りを走る市電の線路上に、空襲で亡くなった人々の遺体が並べられ、Ｓ・Ｋさんたちもそれを見たのだ。今は３０ｍほどはあろうかと思われる広い通りである。昔はどうだったのだろうか。五月末の暑い日差しに死体は時とともに油（脂肪）と血を流し、死臭を漂わせたに違いない。一両編成の市電の「七番」は「神奈川中央市場－滝頭間」。「九番」電車が「六角橋－滝頭間」を走った。『俺の娘が嫁に行って一年ほどして廃線になったから、昭和４６，７年頃まで走っていたと思うよ』と言う。娘と言っても、今は還暦に近いはずだ。この人にとっては娘の結婚が、過去を計る基準になっているようだ。余程娘さんを可愛がっていたに違いない。下町にはよくこういう善人を見かける。また　滝頭には「市電

保存館」があって、すぐそこのバス停から15分ぐらいの所だから行ってみるといいよと、丁寧に教えてくれる。下町の人は聞かれもしないことにまで親切に答えてくれる。
後日を期して、そのまま「浦舟通り」を「阪東橋」に向かう。

Ｓ．Ｋさん家族が必死に辿り着いた阪東橋の今は、市営地下鉄１号線（ブルーライン）の「阪東橋駅」である。そして駅名の他に近くのバス停、「曙町通り」と「浦舟通り」の交差点、その他何箇所かに「阪東橋」の名が付いている。橋であるからには、川が流れていたわけである。しかし、今は川がない。それを説明するには本題からは外れるが「吉田新田」を語らざるを得ない。「吉田新田」を語らずして横浜の近現代史は語れないと思うからだ。市販の「横浜市全図」を見ながらだと分かり易いが、言葉だけでの説明では聞く方も理解し難いし、話す方も説明し難い。
横浜市中心部を示す地図では「横浜港」が右に位置する。「吉田新田」は釣り鐘そっくりの形をしていて鐘の底（開口部）を港側に見せ、ごろりと横に寝そべった形をしている。吊り環に相当する所が「日枝神社」である。磯子区氷取沢を水源とする２級河川である「大岡川」は、上大岡－弘明寺を通り、「日枝神社」で「中村川」と分流する。



（写真２　中村川・大岡川分流点）

吊り環の外が「蒔田公園」。京浜急行の南太田－黄金町－日ノ出町に沿って流れる「大岡川」が「吉田新田」の右側境界になり、一方分かれた「中村川」が左側境界を作る。「吉田新田」は、「大岡川」が運ぶ土砂が堆積し、横浜港が入り込む浅い入海であった。釣り鐘の底が「派大岡川」。「派大岡

川」は昭和５２年に埋め立てられ、今のＪＲ根岸線がそれである。つまり「大岡川」と「中村川」それに「派大岡川」に囲まれた区域で、地図上からもそれがはっきりわかる。「大岡川」と分かれた「中村川」は石川町駅の下を流れ、川の上を「首都高速神奈川３号狩場線」が通る。根岸湾にそそぐ「堀割川」が釣り鐘左側の「中村川」を久良岐橋で直角に突っ切って

（写真３　中村川・掘割川分流点）

「吉田新田」に入り込み「新吉田川」になって直進。その川が駿河橋近くで「新富士見川」と分かれる。「新富士見川」は短い流れを作り右境界の「大岡川」に合流する。一方の「新吉田川」は吉野町で４５度向きを変えて釣り鐘の胴ほぼ中心部を「大岡川」「中村川」に平行して港に向かって下る。その下流、千秋橋から蓬莱橋までの４００ｍが「吉田川」で、その川が「派大岡川」に合流する。この両吉田川と日ノ出川は、根岸の「堀割川」を開削した時の副産としてできた川である。

一方、右側を構成する「大岡川」に架かり、黄金町駅脇を通る「浦舟通り」の「太田橋」から「阪東橋」は指呼の間にある。「新吉田川」「吉田川」とも、昭和４７年に埋め立てられて「阪東橋公園」、「大通り公園」となって市民の憩いの場として親しまれている。この公園の下を市営地下鉄１号線が走る。「よこはまばし商店街」の長いアーケードをウィンドショッピン

グしていた古老に訊ねると「大通り公園」に生まれ変わる前の川に平底の達磨船が艀として積荷を載せて「みなとよこはま」からここまで物資を輸送してきた。川は水深の浅いどぶ川で、川幅は２０～３０mはあったという。古老が見た時期の「吉田新田」内の川は、水運の必要が薄れ、浚渫などやらなくなっていたのだろう。

黄金町駅構内に留まることなく、「大岡川」の川渕から「炎と煙が吹き付ける中を頑張るんだと自分にも言い聞かせて」必死に辿り着いたＳ．Ｋさん一家は焼け残った「阪東橋」で辛くも命を取り留めたのだ。

阪東橋から公園内を下ると、「よこはまばし商店街」近くに『横浜大空襲』の犠牲者を慰霊し「平和を誓う」碑が建てられている。５メートル角ぐらいの基壇の上に、更に一段と高い台座。その上にブロンズ造りの「平和祈念碑」（作者：横田　七郎）が建っている。

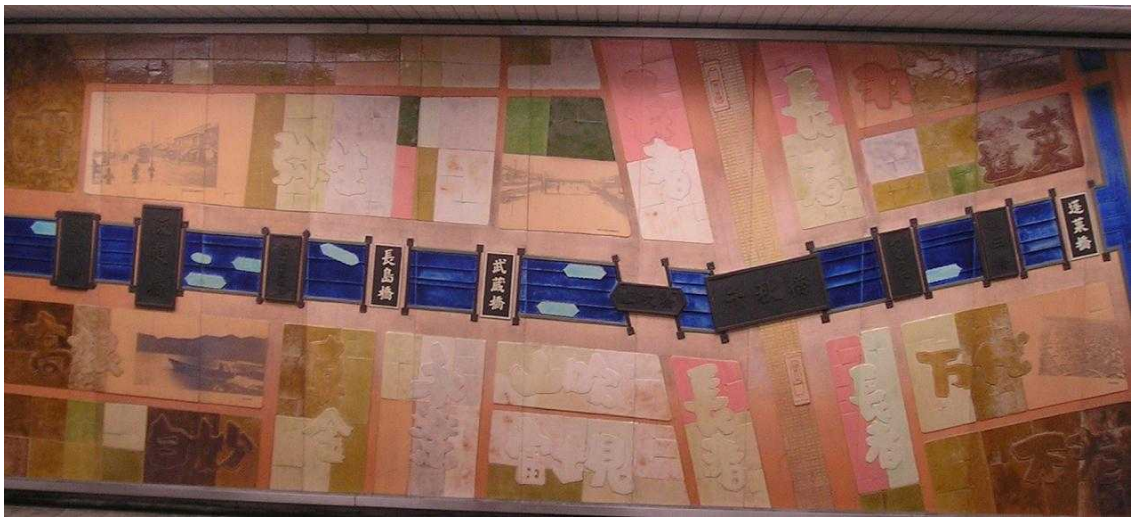
（写真４　平和祈念碑）

祈念碑の前に白い石造りの分厚い書物形式の見開きページに、日本語と英文で「由来之記」が刻み込まれている。「非武装の一般民衆が多数犠牲になった」と述べたあと、概略次のような内容である。

「遺族縁類相倚り、相扶け、私財を投じ、心ある市民の合力を得て、『平

和祈念碑』を建立発願した。共に手をたずさえて平和のメッセージを念じ、全世界恒久平和を享受出来る世界の実現を欲して、惻隠の情を意味する『愛』と飢餓のない世を理想とする『平和』の文字を、我らのいのちを支える『地球』に配して象徴とした。この人類至高の祈りが志ある人々により継承発展され、犠牲者も平和の使徒の先駆者として至福の時を共に迎える日の近きことを信ずる。」
「横浜戦災遺族会」の建立した『鎮魂の碑』である。

市営地下鉄１号線が走る「伊勢佐木長者町」駅構内の壁の一角に、「大通り公園」が昔は川であり、橋が架かっていたことを示す「橋の詩」と名付けられたレリーフが掛けられている。「日本橋」に始まって「ＪＲ関内駅」



（写真５　橋の詩）

近くの「蓬莱橋」までの１０橋が川の流れとともに示されている。川には数隻の達磨船や小型の艀が走っている。「日本橋」の次がひときわ大きい橋名板で「阪東橋」が示されている。「阪東橋」はこの河川では比較的幅広の橋だったようだ。「藤棚浦舟通り」は西区を貫く幹線道路だからだ。次いで「よこはまばし」「長島橋」「武蔵橋」と続く。これらの橋が曙町各丁と、それぞれ高根町、黄金町、永楽町を結び付ける。横書きの船名板の「山吹橋」。長者町を貫く道に架かる「千秋橋」。この橋の橋名板は「阪東橋」のそれ以上に大きい。昔は田の畔道を意味する八丁畷と言われたそうだが、今は「伊勢佐木長者町駅」の真上を通る。「浦舟通り」以上の幹線道路だ。縦書きの船名板に戻って「つるのはし」「権三橋」そして最後が「蓬莱橋」である。これらの船名板は、橋の名前を表していた実物で、レリーフが掛けられるようになった経緯を次のように解説している。

「大通り公園は昭和４８年まで吉田川・新吉田川と呼ばれて１本の運河でした。昔をしのぶ多くの市民から、かつての運河にかかっていた１０橋

の橋名板を保存し、公園内に設置を望む声がありました。そこでこれらの橋名板を含む記念レリーフとして設置することにきまりました。こうした歴史的、文化的遺産を身近なものとして残し、人間性あふれる街づくりのシンボルとしたいと思います。

昭和５６年１０月３１日。　細郷　道一

署名者細郷　道一横浜市長は、飛鳥田一雄市長に継いで昭和５３年に市長に当選した２２代目市長である。しかし、3期務めた在職中に死去した。「三ツ沢競技場」など運動施設や運動公園などの整備・拡充に尽力した市長で、自らもスポーツマンとして有名であった。

運河が埋め立てられた「大通り公園」は、総延長１２００m、平均幅３０m、面積３.６ｈａの帯状の公園として昭和５３年9月9日に開園した。新しい「ヨコハマ」を築く為の都心部緑化地整備事業の中で、大通り公園は中心的役割を果たしており、この公園の完成により、山下公園、日本大通り、横浜公園、くすのき広場、大通り公園、蒔田公園へと続く緑の軸線がほぼ完成した。公園は野外ステージのある「石の広場」（今は取り壊されてない）、水の一生をテーマにした「水の広場」、地下鉄駅とつながる

（写真６　大通り公園の水の広場）

「サンク・ガーデン」、「みどりの森」の４つの部分から構成されている。

（写真７　ロダン瞑想）

また　公園内各所には、オーギュスト・ロダン（瞑想）ヘンリー・ムーア（３つの部分からなるオブジェ)、オシップ・ザッキン（働く女）らの彫刻が設置され、芸術作品を楽しむ場にもなっている。

当時の横浜市は昭和１５年(1940)の国勢調査で人口９７万近くを擁し、日本第５の都市であるとともに、第２の港湾設備を持っており、航空機、製鉄工場もあったが、最も重要なのは造船業と自動車工業であった。重要な軍需工業地帯であったが、市域面積が広く比較的人口密度が低いため、都市爆撃の目標の中では優先度が高くなかった。

『東京大空襲』の後に続く１０日間に、名古屋、大阪、神戸、再び名古屋が焼夷弾爆撃を受けた。4月中旬　東京の工業地帯と川崎が爆撃をうけ、川崎と共に鶴見が焼き払われた。これが県下で最初の焼夷弾による市街地じゅうたん爆撃であった。しかし、この段階ではまだ横浜の中心部は、京都を除く他の大都市と違って焼夷弾爆撃の洗礼をうけていなかった。横浜市民の中にはミナト横浜はアメリカと縁が深いから爆撃されないかもしれないと希望的観測を抱く人もいた。横浜市民の抱くこのような希望は　日本の文化や仏像をはじめとする古美術品などの貴重な価値を熟知していたアメリカ人が　京都、奈良、鎌倉などの古都を爆撃しないよう米国政府や軍部に働きかけた結果だと信じた古都市民と共通するものであった。空爆

に対して逃避以外、何らの手だても持たない庶民の空頼みである。竹ヤリによる攻撃とバケツリレーの消火体制が一体何の役に立つというのか。
周辺都市が連日爆撃を受けているにも関わらず、古都が無疵でいることの、もっともらしい理由を見い出し、この状態が長く続くことを神頼みし安心したかったのだ。事実この三古都は本格的な爆撃を免れていた。そして古都市民のアメリカに対する感謝の念が戦後、具体的な形となって表われた。鎌倉駅西口（江ノ電側）に時計塔を持つ小さな広場の一角にひっそりと建つ「ウォーナー博士記念碑」がそれである。碑には博士のレリーフが嵌め込まれ「文化は戦争に優先する」と大書された幅７０センチ　高さ２メートルほどの記念碑だ。更にこの碑には「日本の文化財の多くが戦禍を免れたのは博士の主張の成果」というメッセージが添えられている。ウォーナー博士がアメリカ政府や軍部に働きかけ、鎌倉を爆撃から守ってくれたことに感謝し顕彰したものである。これが「ウォーナー伝説」である。博士自身は　この伝説を強く否定している。にもかかわらず、博士が否定すればするほど彼の否定は、日本文化に造詣が深く、日本人的心情を持つ博士の奥ゆかしさの表れと喧伝され、ますます称賛された。この称賛を煩わしく感じた博士は、終にはこの種の発言を一切黙殺している。冷戦下この伝説を日米両政府共に親米感情を醸し出す好材料として、否定してこなかった。害にならないなら嘘でも利用せよというわけである。この辺の細部については角川書店出版　吉田　守男著『京都に原爆を投下せよ』に詳しい。

横浜はアメリカへの生糸輸出の王座を長く誇っていたが、第一次世界大戦後は経済恐慌と関東大震災とで打撃を受け、工業化に活路を求めた。日本が中国侵略を始めて戦時体制に入ると、横浜でも軍需産業が盛んになり、港湾施設にも軍事色が広がっていった。５月８日にナチス・ドイツが無条件降伏して　ヨーロッパの戦争は終わった。全く孤立無援となった日本に連合軍の軍事力が集中してくることがはっきりしていたにもかかわらず、軍部も政府も本土決戦を唱え、天皇を中心にした独裁権力の座を墨守しようとするだけで、増大していく国民の犠牲を座視し続けていた。「帝国陸海軍あって、国家なし」であった。アメリカ軍は日本本土上陸作戦に先立って、爆撃により日本国民の戦意を喪失させようとしていた。『横浜大空襲』は最後に残された無疵の目標に対して、それまでに蓄積増強された戦力と培われた戦争技術をつぎ込んで行われた一大軍事作戦であった。

昭和２０年５月２９日は戦時下とはいえ、それまで市民の日常生活がそれなりに営まれていた。しかし、空襲がその場を一瞬に戦場に変えた。近代戦争には前線も銃後もない。古来、自衛を唱えなかった戦争はなかった。

「生存のために」という自己正当化の理由づけがなされ、侵略戦争に突き進んで行った。終戦の詔書の段階に至ってもなお、宣戦は「帝国の自存」のためと述べている。

戦後６０数年が経過し「自衛のための戦争であった」、「仕掛けられた戦争だった」と唱える輩の輩出とともに、戦前の伝統的文化・習慣の復活を目論む反動的兆候が感じられる昨今、自律し確固とした歴史観の確立が必要とされている。

戦後改革の果実のひとつである「社会の民主化」がなし崩し的に崩壊するのを座視してはならない。

神奈川県下には「横浜の空襲を記録する会」などいくつかの記録団体があり、今なお調査が続けられています。戦後６４年が経過した今を生きる私は、かつての横浜市民が経験した『大空襲』を自らのものと受け止め、一市民の立場から平和の大切さを改めて考えると同時に、開港１５０周年を迎えた横浜の現在が、過去の多くの犠牲の上にあることに想いを深くしたいと考えます。少なくとも開港記念日以上に『５月２９日』を記憶に焼き付け、犠牲になった無辜の横浜市民の無念の日として、戦災の記録をひもとき、自らの『不戦の誓い』を新たにしたいと思います。

なお　本論中に独断的結論・偏見・憶測と受取られかねない記述個所もあろうかと思いますが調査途上でもありますので、ご了解戴きたくお願い申し上げます。

終わり